

「家がいいね」 第20号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2006.1.1

年頭に贈る言葉です。本年もどつどつよろしく。

「あたりまえ」

あたりまえ

こんなすばらしいことを、

みんなはなぜよろこばないのでしょう

あたりまえであることを

お父さんがいる

お母さんがいる

手が二本あって、足が二本ある

行きたいところへ自分で歩いてゆける

手をのばせばなんでもとれる

音がきこえて声がでる

こんなしあわせはあるでしょうか

しかし、だれもそれをよろこばない

あたりまえだ、と笑ってすます

食事がたべられる

夜になるとちゃんと眠れ、

そしてまた朝がくる

空気をむねいっぱいにすえる

笑える、泣ける、叫ぶこともできる

走りまわれる

みんなあたりまえのこと

こんなすばらしいことを、

みんなは決してよろこばない

そのありがたさを知っているのは、

それを失くした人たちだけ

なぜでしょう

あたりまえ



井村和清

(昭和54年1月1日 新年の贈り物)

31歳で亡くなった内科医が、元旦の未明に苦しい呼吸の中で、妹に宛てて贈った詩です。その1年前、彼は肉腫で右足を切断しました。半年のリハビリの後に、復職して間もなく、肺への転移を知りました。体調不良をおして精一杯診療をする事が生きる事と願いつつ、ついに限界を感じた年末に、彼は実家での最期を望みました。「失いなから、こんなに素晴らしいことを知っているのに、

いま死にたくはないなあ。本当にしたい医療も見えるのに」とこころの底から嘆きます。同時に彼は、支えてくれる家族との別れにも心を砕くのです。1歳余の娘の飛鳥ちゃんへ、そして妊娠に喜んだ「まだ見ぬ子」へのために、私家版としてその思いを書き綴ったのです。

彼は、「病人にとつてみつつの不幸」を考え、自分の病気を案じてくれる人がいないことを最大の不幸だと感じました。それは自分が回診した対話の中で、患者さんが泣く気持ちを知ったからです。

「淋しいと、母親を捜す子供のよう」に、その人は泣くのです。人はひとりでは生きられるものではないと思います」彼は、家族に手をとられつつ、元旦から3週間の時間を共にして、旅立ちました。

外来で聞く「普通の人」

「せめて皆と同じように『普通でいる』ことが出来たら」「こんな自分では情けない」と外来相談の悩みの中で、よく聞かれます。

聞くと「その普通の人」は失敗しません。それでは平凡な人ではなく「良い所取り、完全無欠のスーパーマン」のような人になります。つまり在りそうもない人が、この「普通の人」です。

自分を嫌いに思わずに、「こんな自分でもいいのかも」と思ふことから、気持ちを楽にしてもいいのではと私は思うのですが。

講演会のご紹介

前回もお話した、佐々木正美先生の講演会です。

「ちよつと気になる『ふつつ』の子」

1月29日(日) 10時〜16時 有料

伊勢市観光文化会館で 問い合わせ先『風の広場』

電話・ファクス 0596・29・0325

「対話する家族」

この著書で河合隼雄さんは、「家族の対話」こそ今の日本で一番むつかしいと言われる。楽しい面だけが対話ではなく、喜怒哀楽、押さえられぬ感情が互いを往復する事が大事なのです。写真はご家族が撮影し当紙へと頂きました。診察



も対話の仲介の一助になれるなら、家族の面白さも、この先さらに実感できるのではと思います。